2020 年 2 月 16 日　　説教「目をさましなさい」

ヨハネの黙示録 3 章 1~6 節

黙示録 3 章。サルデスにある教会への手紙です。五番目になります。

１．サルデスの教会（1~2 節）

①サルデス（1）**「また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。」**サルデスという町は地図にあるように、テアテラの南東 48 キロほどに位置していました。難攻不落の要害の地でもありました。富裕な町でした。産業は染色、織物、金細工でした。紀元前 549 年にペルシャのクロス王に、前 218 年にはシリアの王に攻略された歴史を持ちます。後にローマの支配下に置かれました。紀元 17 年には大地震により崩壊。町の人々は怠惰の嫌いがありました。この町に立てられた教会は、迫害もなく異端の影響もありませんでした。

②実は死んで（1）**「神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。『わたしは、あなたの行いを知っている。あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。』**七つの御霊とは聖霊のこと。七つの星とは、七つの教会のこと。それらを持つ方とはキリストご自身です。その方は、サルデスの教会は、外側は生きているように装っているが、内実は霊的に死んでいると言われるのです。実際のところ、サルデスの教会には無気力がはびこっていたのです。ここに、教会の問題点がはっきりと指摘されるのでした。

③目を覚ませ（2）**「目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行いが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。」**霊的に死にかけている教会に、目をさましなさい！と主は叱咤されます。眠っている彼らの信仰に、目覚ましを与えているのです。そして、目が覚めたなら、霊的に瀕死の信徒を励まし、信仰的な励ましを与えなさいと命ぜられるのです。サルデスの教会が神の御前には。霊的欠陥に気づかされていくように、手が差し伸べられているのです。

２．目を覚まさなければ（3～4 節）

①どのように受けたのか（3）**「だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。」**霊的に寝ぼけぼけている者達に勧められることは、信仰の原点に立つことでした。自分たちが、かつてどのような者であったか、どのように救われてきたのかを思い出し、福音の原点に立ちかえることなのです。救われた時に与えられた教えをしっかりと守り、悔い改めの心をもって、主を見上げていきなさいと勧められるのです。

②盗人のように（3）**「もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。」**それでも目を覚まさずに、眠ったままでいれば、どのようなことになるか。主は秘かに来てしまわれるというのです。それも盗人のように来られるというのです。「見よ。わたしは盗人のように来る。目を覚まして、身に着物を着け、裸で歩く恥を人にみられないようにする者は幸いである」（黙示録 16:15）。いつ来るかをあらかじめ知らせておく盗人はいません。知らないうちに来るのです。

③白い衣（4）**「しかし、サルデスには、その衣を汚さなかった者が幾人かいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らはそれにふさわしい者だからである。**安穏をむさぼっていたサルデスの教会のなかにも聖徒がいました。「衣を汚さなかった者」とは、信仰を第一に歩み、罪の誘惑の罠に陥ることなく歩んできた者達です。彼らはまるで、白い衣を着るがごとく純粋に主とともに歩み、主に仕えて来たものたちでした。これはなかなか大変なことです。皆とは違う道をとるということはできないことです。

３．いのちの書に記される（5～6 節）

①勝利を得る者(5)**「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。」**悔い改めの詩篇である 51 篇には「ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう」とあります。罪を赦された者の象徴は白い色の衣でありました。勝利とは、信仰的勝利です。霊的勝利です。イエス・キリストは、私たちの罪のために十字架にかかってくださいました。それゆえ、自らの罪を認め、主の贖いの死を受け入れて、罪の赦しを請うていく者には、赦しを伴う救いが備えられるのです。

②いのちの書（5）**「そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。」**黙示録には何度となく「いのちの書」という表現が使われています（13:8,17:8,20:11）。主の恵みによって信仰を与えられた者たちの名が、いのちの書に記されているというのです。それは主なる神の前でも明らかになるのです。ルカ 10.:20 においてもイエス様は「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」と言っておられます。

③耳のある者は（6）**「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」**ま「耳のある者は」と言われて、素直に耳を傾けるかどうかが問題です。主からの御言葉を受け取るならば、そこから新しい道が開かれてくるのです。そうありたいものです。

《結論》

サルデスの教会について読んでいくと、よその教会のことではなく、自らが関わる教会と自らのことを言われているような気がしてなりません。つまり、特に教理上の問題があるわけではない。正統的神学を標ぼうしていて、温順に教会の歩みもなされているかもしれない。しかし、「あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる」という御言葉にあるように、生きているように思っていても、霊的に瀕死の状態にあるのではないだろうか。ダブルスタンダードになっているのではないか。キリスト教の立場を表では掲げていても、ご都合主義で、もう一つの価値観にも影響されて生きているのではないか、と問われるのです。真理のためなら、命をかけてもというところが薄れてしまっているのではないかと、迫られるのです。

「武士道とは死ぬことと見つけたり」と言われますね。また、任侠の世界というのは、私達には縁もゆかりもない悪の世界かもしれませんが、高倉健などが演じた世界の任侠の本筋は、仁義を重んじ、困っていたり苦しんでいたりする人を見ると放っておけず、彼らを助けるために体を張る自己犠牲的精神があるというのです。その世界でも、その精神を全うする人は少ないと思います。でも、大切な事の為には、命を張るという理想を持っている点は、見るべきところがあるなと思います。キリスト教も初代教会の時代や迫害がある時代には信仰を持つこと自体が命がけでありました。戦中には国家と妥協した教会が大方でしたが、命を張った教会もありました。現在の中国でも、その信仰を保つために、多くの教会が試されています。一方、私たちの教会を含む、日本の教会はどこかで安逸をむさぼっていないだろうかと問われます。

キリスト信仰に命がかかっていないと、自らのこと、財、利益、名誉、などを守る、欲望中心の世界になってしまうのです。「誰でもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、わたしについて来なさい。」（ルカ 9:23）とキリストは言われました。

今朝「目をさましなさい」と私たちは迫られています。手放せない何かがある、棄てられないものがある、しがみついているものがある。そんな私たちも、目をさましなさいと言われているのです。もう一度、福音の原点に立つのです。キリストが私たちの罪のために十字架にかかって下さったという本気を、私たちも真正面から受けとりたいのです。目を主からそむけることなく、あなたを本気で愛してくださる主を覚えたいのです。主の愛を本気で受け止めるために、まずは小さな何かで良いのです。捨てられないでいて、すてるべきことを、手放さなければならない何か、何か一つで良いのです。捨てて主の前に、もう一度自らの罪を告白し、十字架と復活の福音を正面から自らのものとして、受け取らせていただきたいのです。